

PAT-NO: JP401233207A
DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 01233207 A
TITLE: HAIR TONIC

PUBN-DATE: September 19, 1989

INVENTOR-INFORMATION:

NAME	COUNTRY
CHO, AKIMITSU	

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME	COUNTRY
KK CHIYUWA INTERNATL N/A	

APPL-NO: JP63059486
APPL-DATE: March 15, 1988

INT-CL (IPC): A61K007/06

ABSTRACT:

PURPOSE: To obtain a hair tonic by combining the extract of at least 5 kinds of crude drugs selected from MOKKA (fruit of *Chaenomeles sinensis*), TOUKI (root of *Angelica acutiloba*), SENKYU (Rhizome of *Cnidium officinale*), BONTANPI (root sheath of *Paeonia montan*), YOSHISHI (seed of *Cuscuta chinensis*), HAKUSENPI (root sheath of *Dictamnus dasycarpus*), etc., with the extract of at least one kind of crude drug selected from NINJIN (root of *Panax ginseng*), GOKAHI (bank of *Periplosa sepium*), etc.

CONSTITUTION: The objective hair tonic having excellent effect is produced by combining (A) a mixture of extracts (extracted with alcohol, water, warm water, etc.) of at least 5 kinds of crude drugs selected from MOKKA, TOUKI, SENKYU, BONTANPI, TOSHISHI, HAKUSENPI, BOUFU (root of *Ledebouriella seseloides*) and TANJIN (root of *Panax ginseng*) and (B) a mixture of extracts of one or more kinds of crude drugs selected from NINJIN, GOKAHI, HANGE (rhizome of *Pinellia ternata*), DAIYOU (rhizome of *Rheum palmatum*), OUGI (root of *Astragalus mongholicus*), GOSHITSU (root of *Achyranthes fauriei*), KUKOSHI (fruit of *Lycium chinense*), TOUNIN (seed of *Prunus persica*), BUKURYOU

(sclerotium of *Poria cocos*), KOUKA (flower of *Carthamus tinctorius*), KANKYO (rhizome of *Zingiber officinale*), CHINPI (peel of *Citrus unshiu*), KANZO (root of *Glycyrrhiza glabra*), BYAKUBU (root of *Stemona japonica*), SOUJINSHI (seed of *Morus alba*), BINROU (seed of *Areca catechu*), JIKOTSUPI (root sheath of *Lycium chinense*), HOKOTSUSHI (seed of *Psoralea corylifolia*), KYOKATSU (rhizome of *Notopterygium incisum*), SAIKO (root of *Bupleurum falcatum*), TENMA (rhizome of *Gastrodia elata*), BYAKUSHAKU (root of *Paeonia lactiflora*), KEIGAI (flower of *Schizonepeta tenuifolia*), KEISHITAISOU, KUJIN (root of *Sophora flavescens*), KEIKETSUTOU (stalk of *Mucuna birdwoodiana*), MEIKETSUTOU, KOTSUSAIHO (rhizome of *Drynaria fortunei*), KASHOU (peel of *Zanthoxylum armatum*) and OUREN (rhizome of *Coptis japonica*).

COPYRIGHT: (C)1989,JPO&Japio

⑤ Int. Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑬ 公開 平成1年(1989)9月19日

A 61 K 7/06

8213-4C

審査請求 有 請求項の数 1 (全7頁)

⑭ 発明の名称 養毛剤

⑯ 特 願 昭63-59486

⑰ 出 願 昭63(1988)3月15日

⑱ 発 明 者 趙 章 光 中華人民共和国北京市朝陽区勁松七区725号 北京市毛髪再生精廠内

⑲ 出 願 人 株式会社中和インター ナショナル 東京都豊島区南池袋3丁目18番35号 OKビル3F

明細書

1、発明の名称

養毛剤

2、特許請求の範囲

モッカ、トウキ、センキュウ、ボタンビ、トシシ、ハクセンビ、ボウフウ、及びタンジンからなる群より選ばれる少なくとも5種以上の生薬の抽出物の混合物と、ニンジン、ゴカヒ、ハング、ダイオウ、オウギ、ゴシツ、クコシ、トウニン、アクリョウ、コウカ、カンキョウ、チンビ、カンゾウ、ビャクブ、ソウジンシ、ビンロウ、ジコッピ、ホコッシ、キョウカツ、サイコ、テンマ、ビャクシャク、ケイガイ、ケイシタイソウ、クジン、ケイケットウ、メイケットウ、コッサイホ、カショウ、及びオウレンからなる群より選ばれる少なくとも1種以上の生薬の抽出物の混合物とを有効成分とする養毛剤。

3、発明の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

この発明は、育毛、毛髪再生、脱毛予防等、

毛髪の養生に極めて効果的な養毛剤に関する。

〔従来技術〕

脱毛症の原因として、一般的には遺伝、血行障害等が関与していると言われており、脱毛予防には従来からマッサージ、指圧、灸、或いは漢方薬、薬酒等が利用されてきた。そして現在刺激薬としてカンタリスチンキ、ニンニクエキス、バントテニールエチルエーテル等が、また副交感神経刺激薬として塩化カルプロニウム等が外用薬として使用されている。この他養毛法として紫外線治療法、共鳴スパーク療法、ヘリウムネオンレーザー治療法等も行われている。

〔発明が解決しようとする課題〕

上記したような薬剤や治療法はそれなりの効果があるものの、脱毛が皮膚、栄養、内分泌等の広範な分野に関係をもっているため、これという特効薬がなく、有効率と治癒率の極めて高い養毛剤の開発が要望されていた。

この発明は、毛髪再生、脱毛予防、育毛等に極めて効率的で、しかも治療が簡単な養毛剤を

提供することを目的としている。

〔課題を解決するための手段〕

上記目的に沿うこの発明の養毛剤は、モッカトウキ、センキュウ、ボタンビ、トシシ、ハクセンビ、ボウフウ、及びタンジンからなる群より選ばれる少なくとも5種以上の生薬の抽出物の混合物と、ニンジン、ゴカヒ、ハンゲ、ダイオウ、オウギ、ゴシツ、クコシ、トウニン、ブクリョウ、コウカ、カンキョウ、チンビ、カンゾウ、ビャクブ、ソウジンシ、ビンロウ、ジコッピ、ホコッシ、キョウカツ、サイコ、テンマビャクシャク、ケイガイ、ケイシ、タイソウ、クジン、ケイケツトウ、メイケツトウ、コッサイホ、カショウ及びオウレンからなる群より選ばれる少なくとも1種以上の生薬の抽出物の混合物とを有効成分とすることを特徴とする。

以下この発明を詳しく説明する。

(A) 語句の説明

養毛とは、育毛、脱毛予防、毛髪再生、及びふけやかゆみ取りも含めた毛髪の養生のことを

(チョウセンニンジン)の根。
トバチニンジンの根茎やサンシチニンジンの根が使用されることもある。

ゴカヒ(五加皮)ガガイモ科のベリブローサ属植物の根皮またはウコギ科のウコギ、マンシュウウコギ等の根、根皮。

ハンゲ(半夏)サトイモ科カラカビシャクの根茎。

ダイオウ(大黄)タデ科ダイオウ属植物の根茎。
オウギ(黄芩)マメ科キバナオウギ、ナイモウオウギ等の根。

ゴシツ(牛七)別名牛膝、ヒユ科イノコズチの根。

クコシ(枸杞子)ナス科クコ或いはナガバクコの果実。

トウニン(桃仁)バラ科モモ或いはノモモの種子。

ブクリョウ(茯苓)サルノコシカケ科マツホド

言う。

抽出物とは、水またはアルコール等によって抽出した生薬の抽出物のことを言う。

混合物とは、混合してできる単なる混合物及び/または反応物のことを言う。

(B) 生薬の説明

モッカ(木瓜)バラ科のカリンまたはボケの果実。

トウキ(当歸)セリ科カラトウキ、ホッカイトウキ、大和トウキ等の根。

センキュウ(川芎)セリ科センキュウの根茎。

ボタンビ(牡丹皮)キンボウゲ科ボタン等の根、根皮。

トシシ(菟絲子)ヒルガオ科マメダオシ等の種子。

ハクセンビ(白藜皮)ミカン科ハクセンの根皮。
ボウフウ(防風)セリ科ボウフウ等の根。

タンジン(丹参)別名紫丹参、シソ科タンジンの根。

ニンジン(人参)ウコギ科のオタネニンジン、

の菌核。

コウカ(紅花)キク科ベニバナの花。

カンキョウ(干姜)別名乾姜、ショウガ科ショウガの根茎。

チンビ(陳皮)ミカン科ウンシュウミカン、オオベニミカン、コベニミカン等橘類の果実の果皮。

カンゾウ(甘草)マメ科植物カンゾウ、ウラルカンゾウ、ナンキンカンゾウ、シナカンゾウ等の根、根茎。

ビャクブ(百部)ツルビャクブ、タチビャクブタマビャクブ等の根塊。

ソウジンシ(桑椹子)クワ科カラグワの集合果
ビンロウ(檳榔)別名檳榔子、シュロ科ビンロウジュの種子。

ジコッピ(地骨皮)ナス科クコの根茎皮層。

ホコッシ(補骨脂)マメ科オランダビュの果実
キョウカツ(羌活)セリ科シシウド類の根茎。

サイコ(柴胡)セリ科ミシマサイコ、マンシュウミシマサイコ、ホソバミシマ

サイコ等の根。

テンマ（天麻）ラン科オニノヤガラ等の根茎。

ビャクシャク（白芍）キンボウゲ科シャクヤクの根。

ケイガイ（薊芥）シソ科アリタソウ等の全草またはシソ科ケイガイの花穂。

ケイシ（桂枝）クスノキ科ニッケイの軟らかい枝、またはクスノキ科カツラの樹や枝の皮。

タイソウ（大蓰）クロウメモドキ科ナツメの果実。

クジン（苦参）マメ科クララの根。

ケイケツトウ（鷄血藤）マメ科昆明鷄血藤、密花豆、白花油麻藤等の藤茎。

メイケツトウ（鳴血藤）マメ科鳴血藤の藤茎。

コッサイホ（骨碎補）ウラボシ科ハカマウラボシ、ビワモドキ科ビワモドキ等の根茎。

カショウ（花椒）別名川椒、ミカン科花椒の果実。

オウレン（黄連）キンボウゲ科オウレン等の根茎。

上記した生薬は、漢方薬における生薬であり大抵の場合乾燥したものを使用する。

(C) 抽出法

中国薬典の浸漬法を利用した抽出法1例につき説明する。先ず生薬の選別、清浄、粉碎、ふるいがけを行い、比率に基づいて各種の生薬を混合し、これと定量のアルコールを蓋付きの容器に入れて浸漬させる。そして定期的にゆすりと攪はんを行い、約25日間前後これを行う。次に上澄み液を汲取り、残さを圧搾してろ過し、上澄み液に残さのろ過液を加え、よく混合して24時間程度放置し、再度ろ過して抽出液を得る。この方法は常温常圧による有効成分の抽出に好適であり、アルコールは刺激剤として使用されるばかりが、滅菌、防腐的作用も有する。

以上の抽出法では、生薬をアルコール中に浸漬して有効成分を溶出させ抽出したが、抽出法は上記抽出法に限定されるものではなく、次の

方法で抽出してもよい。

生薬を水または温湯に浸漬して有効成分を溶出させ抽出してもよい。この抽出法で温湯を使用するときは、50度以下の温度が好ましい。該抽出法では、抽出液が腐敗しやすいが、抽出液を加熱好ましくは真空乾燥すること等により粉体或いは水分の少ないものにし、アルコールや食塩水等の防腐作用を有するものを加えて腐敗を防止し、使用することができる。

抽出液を真空乾燥すること等により、粉末状にしてもよい。

生薬を他の溶媒に浸漬して有効成分を溶出させ抽出して、溶媒を除去したり、アルコール等と置換してもよい。

各生薬毎に有効成分を溶出させ、後で混合してもよい。

生薬の有効成分溶出には、温度を加えたり、好ましくは圧力変化を加えて溶出を速やかに行わせることができる。

抽出物は、水やアルコール中に抽出されて液

体中に存在してもよく、水やアルコール等の溶媒を除去した固形物であってもよい。

生薬を水またはアルコールに浸漬して有効成分を溶出させるとき、必ずしもろ過してろ過液をつくる必要はない。軟膏の製造には、残さも軟膏の助剤として利用することができる。

(D) 養毛剤

生薬をアルコールに浸漬して有効成分を溶出させ残さを除去したものは、そのまま外用養毛剤として使用することができる。

抽出液を乾燥して粉末状にしたものは、水やアルコール等を加え外用養毛剤として使用することができる。

抽出液を乾燥して粉末状にしたもの、及び／または残さを含有する抽出液に助剤を加えて軟膏にしたものは、そのまま外用養毛剤として使用することができる。

尚軟膏をつくる際の助剤には公知の助剤を使用することができ、真空乾燥法も公知の方法を利用できるので、これらの詳細な説明は省略

する。

この発明の養毛剤は、モッカ、トウキ、センキュウ、ボタンビ、トシシ、ハクセンビ、ボウフウ、及びタンジンからなる群より選ばれた少なくとも5種以上の生薬の抽出物の混合物を含有して養毛効果を有するが、後記する実施例中のグループAの養毛剤は、養毛特に毛髪再生に効果があり、グループBの養毛剤は養毛特に脱毛予防に効果がある。またグループCの養毛剤は、毛髪再生、脱毛予防、育毛等養毛全般に効果があり、患者の体質、症状、性別、年齢、発生日等を考慮し適宜選択して治療する。

(E) 治療法と効果

上記した養毛剤の内、今迄最も困難とされた毛髪再生を主体とするグループAの養毛剤を主にして、治療法とその効果につき説明する。

イ、グループAの養毛剤使用

1日に2回患部に塗布し、2月経っても新髪が生え始めないときは、適度に使用回数と用量を増やしてもよく、新髪の生え具合を見て調整

する。尚使用数日後に頭皮が赤くなり、少々かゆくなるような場合は、薬が正常に作用していることを示している。皮膚が敏感な人や肝機能が低下している人は極まれにかゆみ・湿疹がでることもあるので、このような場合は使用を一時中断し、かゆみや湿疹が収まってから再度使用する。この治療は円形脱毛症と完全脱毛症に効果がある。

ロ、グループBの養毛剤使用

毎日2回患部に塗布し、1～2週間連続して使用し、脱毛が停止したらグループAの養毛剤に切替えて治療する。

上記治療法は脂漏性脱毛に顕著な効果があり、男性型脱毛及び各種症候性脱毛に対し一定の効果を示した。

尚グループAの養毛剤使用中にかゆみがでた場合は、グループBの養毛剤に切替え、かゆみが止まったらグループAの養毛剤を使用してもよい。即ちグループAとグループBの養毛剤を使用すると、更に治療範囲が広くなり、併用法

は極初期の若禿治療に最も適している。

ハ、グループCの養毛剤使用

治療法はグループAの治療法と同じ治療法で行うが、1日2～3回患部に塗ってもよい。

1～3期の脂漏性脱毛症、円形脱毛症、全脱毛症、再発性円形脱毛症等に効果がある。尚グループBの養毛剤と併用すると、更に治療範囲が広がる。

(F) 臨床試験

グループAの養毛剤を主にして、グループBの養毛剤を併用したり、グループCの養毛剤を使用して、患者の症状や体質、性別、年齢、或いは症状の発生日や経過を考慮して治療した1033例の臨床試験について、以下にその詳細を示す。

イ、1033例の症例と年齢構成

男性758名、女性275名、この内円形脱毛症は599名、全脱毛症265名、全身脱毛症169名、年齢2歳～65歳、病歴15日～27年、病歴3年以内の者691名である。

症例と年齢構成(表1)

	A	B	C	D	E	F	G
円形脱毛症	47	135	208	115	70	20	4
全脱毛症	10	69	98	49	32	7	0
全身脱毛症	6	22	58	52	23	8	0

*A… 10歳以下 B… 11～20歳
C… 21～30歳 D… 31～40歳
E… 41～50歳 F… 51～60歳
G… 61歳以上

ロ、治療法

グループAまたはCの養毛剤を頭・眉等の患部に、患部が湿潤する程度に塗布し、1日2回半月を一療程として治療する。尚症状によってはグループBの併用治療も行う。また期間中は酒や香辛料の摂取を控え洗髪回数を減らし週1回の洗髪にする。

ハ、療効判定基準

治療 半年以内に正常な頭髪が完全に生えた者、及びこれに準ずる者。

有効 半年間治療後脱毛が50%以上回復し

たもの。

無効 半年間治療後、有効の基準に達しなかった者。

二、治療結果

治療結果統計表(表2)

	治癒		有効		無効		総有効率	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
円形脱毛症	560	91.8	39	6.5	10	1.7	589	98.3
全脱毛 症	221	83.4	38	14.3	6	2.3	259	97.7
全身脱毛症	105	82.1	64	32.0	10	5.9	169	94.1
合計(%)	876	84.8	131	12.7	26	2.5	1007	97.5

上表から各種脱毛症患者の療効と治癒率は、円形脱毛症が最もよく、91.8%、全脱毛症が83.4%、全身脱毛症が最も低く62.1%、3者の平均治癒率は84.8%であり、3者の総有効率は大きく、夫々98.3%、97.7%、94.1%であった。また以上の内で443例の生髪状況に対し統計を行った結果、治療開始からうぶ毛が生え初めるまで、最短で僅か7日、最長で56日を要し、平均は

23日であった。

ホ、療効の詳細

年齢と治癒率の関係を調べると、50歳以下の患者は89%以上であり、50歳以上では75%以下である。これは老化に伴い人体の諸機能が低下し、毛髪再生に影響を及ぼしているからと考えられる。

性別と有効率の関係を調べると、明確な差が現れず、男女共に大差なく有効であることが分った。

病歴と治癒率の関係を調べると、病歴5年以内の者は89%に達しており、病歴が長くなるに従い療効が悪くなり、11年以上が最も悪く僅かに45%にも低下することが分った。

療程と療効との関係を調べると、3~5療程において療効がよく、以後逐次療効が下降していることが分った。

年齢と再発の関係を調べると、11歳から40歳の間の患者の再発率が最も高く、10歳以下と40歳以上の患者の再発率が比較的に少

いことが分った。

再発と病歴の関係を調べると、病歴7年以内の者の再発率が17.3%以下と比較的に低く7年以上の者は最高で34%と比較的に高いことが分った。

(G) 毒性試験

イ、急性毒性

最も作用の顕著なグループAの養毛剤の20%と10%の稀釈液をつくっておき、中国産昆明種小白鼠(18~22瓦)に1日1回3日間連続塗布して急性毒性のテストを行ったが、毒性反応を示さなかった。

ロ、亜急性毒性

任意に選択した雄の中国産大鼠60匹(体重100~150瓦)を4組に分け、夫々背部の毛を脱毛し、5%、20%、50%の稀釈液をつくり、毎日1回無毛区に塗布し、体重、血液腎機能、及び肝機能の検査をしたが、何等毒性反応が認められないため、1月後に濃度を倍にして塗布を続け、1月間観察したが、この間大

鼠の一般状況は良好で、養毛剤の使用開始時と濃度増加時に、精神的に消沈したり、毛が逆立ったり、動きが減少する等の現象が見られたがこれらの現象は間もなく消えた。尚大用量組は2月後に腐尾感染が見られ、解剖検査の結果、個別に脾臓の腫れが見られ、急性脾炎との病理報告であり、鉄血黄素沈着及び病巣間質性肺炎が見られた。中用量組は病巣間質肺炎と皮膚毛嚢の増生が見られ、小用量組は何等異常が見られなかった。

また養毛剤を塗ったものは、増毛が迅速で新毛が濃密となり、自然発毛した新毛より太く硬いことが観察され、10日前後に再度脱毛の必要があった。また実験完了後の皮膚は少し厚く硬くなっているものの、潰瘍、壊死、炎症反応は見られなかった。

実験の結果から判断して、グループAの養毛剤は、明らかに毛髪再生を刺激する作用を有し、大用量で軽度の毒性を示し、中用量で皮膚毛嚢の増生が見られ、小用量では何等毒性反応を示

さないが、毛髪成長を促進させる作用を有しており、長期間小用量で使用すれば、何等毒性反応がないことが確認された。

ハ、胎児に対する影響

中国産昆明種小白鼠（体重25～30g）雌雄を1：2で交配させ、毎組10匹づつ妊娠させ、妊娠後18日目に剖腹し、胎児を取出して検査した。その結果、養毛剤を大用量（人体用剤の10倍量相当）使用したものは、胎児に毒性及び奇形が見られ、小用量（人体用剤の5倍相当）を使用したものは、胎児に毒性及び奇形が見られなかった。しかし、安全の見地より妊婦の使用は避けるべきであるとの結論に達した。
(H) 製剤例（量はいずれも重量部を採用する。）
(グループA) 養毛特に毛髪再生に効果

実施例1

モッカ3部、トウキ7部、センキュウ4部、ボタンビ3部、トシシ2部、ハクセンビ2部、ボウフウ4部、タンジン2部、ニンジン4部、ゴカヒ2部、ハンゲ2部、ダイオウ2部、オウ

ギ6部、ゴシツ3部、クコシ2部、トウニン5部、ブクリョウ3部、コウカ1部、カンキョウ3部、チンビ6部、カンゾウ8部、ビャクブ4部、ソウジンシ7部、ビンロウ1部、ジコッピ6部、及びホコッシ8部を清浄、粉碎、ふるいがけして混合し、該混合物15部と濃度58%のアルコール85部を蓋付きの容器に入れ、定期的にゆすりと攪はんを行い、25日目に上澄み液を汲取り、残さを圧搾してろ過し、上澄み液に残さのろ過液を加え、よく混合して24時間程放置し、再度ろ過して養毛剤を得た。

上記養毛剤は、検査、測定、包装を経て出荷される。

実施例2

モッカ7部、トウキ8部、センキュウ7部、トシシ8部、ハクセンビ5部、ボウフウ5部、タンジン5部、ニンジン4部、ゴカヒ2部、オウギ5部、ゴシツ2部、クコシ5部、トウニン2部、コウカ1部、カンキョウ3部、チンビ5部、ビャクブ4部、ソウジンシ6部、ジコッピ

6部、ホコッシ10部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

実施例3

トウキ5部、センキュウ7部、トシシ4部、ボウフウ3部、タンジン5部、ゴカヒ5部、オウギ5部、ゴシツ6部、クコシ4部、トウニン4部、ブクリョウ3部、コウカ3部、カンキョウ4部、チンビ5部、カンゾウ7部、ビャクブ4部、ソウジンシ8部、ジコッピ5部、ホコッシ7部、コッサイホ6部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

(グループB) 養毛特に脱毛予防に効果

実施例4

モッカ9部、トウキ9部、センキュウ9部、トシシ5部、タンジン6部、ニンジン8部、クコシ2部、サイコ8部、テンマ7部、ケイガイ8部、ケイシ5部、クジン5部、メイケットウ6部、コッサイホ6部、カショウ7部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

実施例5

トウキ8部、センキュウ8部、ボタンビ7部、トシシ6部、ボウフウ3部、タンジン7部、ゴカヒ5部、ソウジンシ8部、キョウカツ5部、サイコ8部、ビャクシャク6部、ケイシ5部、クジン6部、ケイケットウ6部、オウレン12部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

実施例6

モッカ5部、トウキ6部、センキュウ6部、トシシ8部、ハクセンビ7部、ボウフウ5部、タンジン8部、キョウカツ8部、テンマ5部、ビャクシャク7部、ケイガイ3部、クジン6部、メイケットウ8部、コッサイホ9部、カショウ9部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

(グループC) 毛髪再生・脱毛予防等に効果

実施例7

モッカ4部、トウキ3部、センキュウ3部、ボタンビ3部、トシシ5部、ハクセンビ2部、ボウフウ3部、タンジン1部、ニンジン3部、

ゴカヒ2部、ハンゲ2部、ダイオウ2部、オウギ2部、ゴシツ2部、クコシ1部、トウニン2部、ブクリョウ2部、コウカ4部、カンキョウ2部、チンビ2部、カンソウ4部、ビャクブ4部、ソウジンシ2部、ビンロウ1部、ジコッピ3部、ホコッシ2部、キョウカツ2部、サイコ4部、テンマ3部、ビャクシャク2部、ケイガイ2部、ケイシ3部、タイソウ2部、クジン2部、ケイケツトウ2部、メイケツトウ2部、コッサイホ4部、カショウ2部、オウレン4部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

実施例8

モッカ3部、トウキ3部、センキュウ3部、ボタンビ2部、トシシ3部、ハクセンビ3部、ボウフウ3部、タンジン2部、ニンジン2部、ゴカヒ2部、ハンゲ1部、ダイオウ2部、オウギ3部、ゴシツ3部、クコシ2部、トウニン2部、ブクリョウ4部、コウカ2部、カンキョウ4部、チンビ5部、カンソウ1部、ビャクブ4部、ソウジンシ5部、ビンロウ1部、ジコッピ

4部、ホコッシ2部、キョウカツ3部、サイコ2部、テンマ2部、ビャクシャク3部、ケイガイ2部、ケイシ1部、タイソウ1部、クジン4部、ケイケツトウ3部、メイケツトウ2部、コッサイホ2部、カショウ2部、オウレン2部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

実施例9

モッカ2部、トウキ4部、センキュウ2部、ボタンビ1部、トシシ4部、ハクセンビ5部、ボウフウ4部、タンジン6部、ニンジン3部、ゴカヒ2部、オウギ4部、ゴシツ3部、クコシ3部、トウニン2部、ブクリョウ1部、コウカ2部、カンキョウ4部、チンビ3部、カンソウ2部、ビャクブ3部、ソウジンシ5部、ジコッピ5部、ホコッシ5部、キョウカツ2部、テンマ4部、ビャクシャク4部、ケイガイ3部、クジン3部、ケイケツトウ2部、メイケツトウ1部、コッサイホ2部、カショウ2部、オウレン2部を使用し、実施例1の製剤法に準じて製剤した。

以上実施9例について説明したが、原料に用いる生薬の配合比は、原料生薬の全量に対して夫々0.1～20%の範囲内で、症状や体質等を考慮して種々の配合比で使用され、製剤例が多数になるのでごく1部を例示したに過ぎず、使用量が実施例の使用量に限定されるものでないことは言うまでもない。また使用される生薬の種類も症状等に応じて適宜増減される。

また上記実施例は、いずれも中国薬典の浸漬法により有効成分を抽出して製剤したが、前記したように圧力変化を利用して有効成分の溶出を促進させ抽出することもでき、真空乾燥や風乾を利用して抽出液を濃縮したり或いは有効成分を粉末化し、助剤を加える等して軟膏状で出荷したり、粉末状で出荷してよいことも言うまでもない。

〔発明の効果〕

この発明は前記のように構成され、従来の治療法や薬剤による治療の有効率と治癒率が低くこれと言う治療法や薬剤がなかったのに比し、

臨床試験における治療結果統計表(表2)に見られるように、有効率、治癒率、共に極めて高く、禿頭や脱毛で人知れずに悩んでいる人達に福音をもたらすものであり、極めて実益的である。

特許出願人

株式会社 中和インターナショナル
代表取締役 中原英越

